東洋文化学科年報　　第2号

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正いたします。(2011.2.21)

正誤表	**誤**		**正**
108頁3行目	パプニング	→	ハプニング

中国縦断旅行記

――広東から延辺へ――

柴田　孝

最近、春休みや夏休みを利用して中国へ出かける学生がたいへん多くなった。彼らはいわゆるパック旅行と異なり、自分でホテルを探し、自分たちで乗り物の切符を買って、できるだけ中国人の生活を見ようとしている。旅行社の世話にならないので費用もずい分安上がりだし、一切を自分がやらねばならないということで良い社会勉強にもなり、まさに一石二鳥である。私も例にもれずその一人として、一九八七年二月二十三日から三月十六日までの二十二日間、中国を歩き回ってきた。普通の学生ならたいてい北京・上海・桂林などを目指すのだろうが、私の最終目的地は吉林省延辺朝鮮族自治州。東北の果ての果てである。旅の途中で多くの日本人に会ったが、みんな口をそろえてこう聞いてくる、「どうしてそんな所へ行くんだ？」。なぜならそこからは日本のパスポートで行くことのできない唯一の国、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）を望むことができるし、またそこには韓国のように近代化されたものでもなく、北朝鮮のように思想でがんじがらめにされたものでもない、本当の朝鮮が（中国であるにもかかわらず）存在するという話を耳にしたからである。

(一)

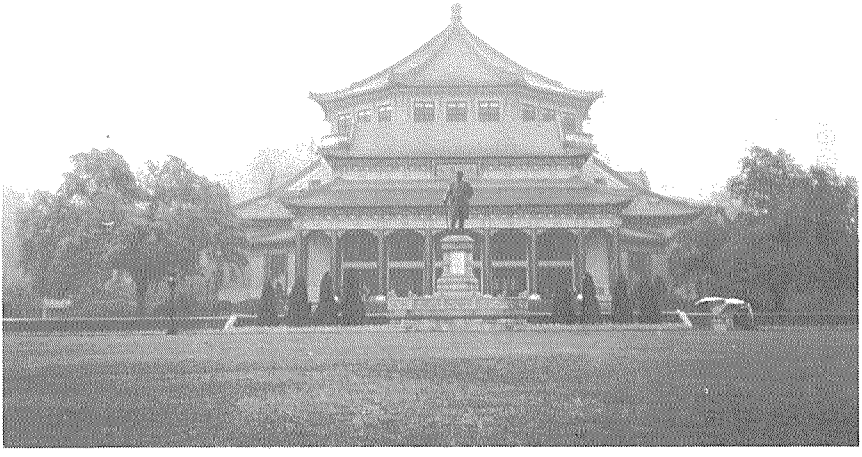
今回の旅行は最初から波乱づくめだった。当初予定していた大阪―上海間の船の切符がとれず、止むなく買った飛行機の行き先が香港。中国の一番北へ行くのに一番南から入ることになってしまった。おまけに出発前にひどい下痢がつづき、一度は旅行を中止しようかとも思った程である。さらに香港行きの飛行機は韓国のソウルを経由したので、なんと六時間もかかってしまった。

ダウンジャケットを着てもぶるぶる震えていた大阪とは違い、香港に降り立ったとたん、汗がじんわり出てきた。暖かい。もう日付けが変わろうという時間なのに、ネオンがあざやかである。サンヨー、ソニー、マールボロ……。私たちの知っている名前がとてつもない大きさ

で前にそびえる。ホテルに着くと、そこに私を待っていたものは……。名前がない。香港のホテルだけは日本で予約して来たはずなのに、名前がない。どうしよう。野宿するのだろうか。色々なことが頭をよぎる。結局向こうの手違いだとわかって、泊まることはできたのだが、初日から疲れが出てしまった。翌日、列車にて国境の街、深圳へ向かう。中国の誇る経済特別区だけあって、さすがに美しい。あそこまでくればもう香港と同じに見える。ただし金網がしっかりと張りめぐらされていて、香港へは自由に行けない様になっていた。ここで私はビザを取得。約一時間半程かかった。ビザ取得後、売店でタバコを買おうとすると、「港幣（香港ドル）！」と言われた。中国でありながら中国のお金が流通していないのである。つい先ほど持ち金を中国元に交換していた私はなんとか店員にたのんでタバコを売ってもらった。その時初めて経済特別区のかかえる問題を垣間見た様な気がした。再び列車に乗り、午後四時に広東省の省都広州に到着。すぐに中国民航のビルに行き鄭州（少林寺）行き飛行機のチケットを予約するが、既に売り切れていた。すぐ買えるのは北京行きだけのようだったので、急遽北京行きが決まった。まあ、こんなところが自由旅行の一番おもしろいところでもあるのだが。交通手段が決まれば次は宿探しである。駅前からバスに乗り、北京語と広東語の車内アナウンスを聞きながら街はずれの沙面という所へ向かう。ここは長崎の出島のような所で今はホテルが数多く建てられている。ここで市人民政府外国人招待所、沙面賓館、勝利賓館と足を運び部屋の交渉をしたが全て満員だからと断られる。市内にもどって華僑用のホテル華僑大厦へ行くがここも満員。もう夜の十時をすぎていたためいい加減に腹もへってきた。華僑大厦のレストランで食事をしていると雨が降ってきた。今夜はロビーで過そうと思った矢先に、「今夜とめてあげるよ。」との返事。私は今までに数回中国へ来たがホテルの部屋がすべて詰まっていることなんて一度もなかったので秘かに期待していたのであるが、その日泊まったのは、風通しが良くとても美しいが、ドタドタ足音の聞こえる廊下の隅であった。

(二)

二月二十五日、ラッシュアワーの自転車のベルで目をさます。一日かけて広州市内を見物した。越秀公園、中山記念堂等々。特に広州博物館のアヘン戦争、辛亥革命



孫中山(孫文)を記念して建てられた広州の中山記念堂

関係の展示にすばらしい物があった。しかし何といってもこの日一番強烈だったのは昼食時である。中山記念堂の近くのソバ屋へ行ったのだが、たしかにソバはうまい。しかし、隣のテーブルを見ると、ハエでまっ黒になっていた。二月とはいえ亜熱帯に属するこ広州では既にハエが活動するほど暖かくなっていたのである。さらにショックを受けたのは次の瞬間である。ハエによる伝染病を心配しながらも、箸を洗わずにソバをすすっていた時、横の中国人がティッシュで自分の箸をふいているではないか！　たまにしか風呂に入らず、トイレに行っても手を洗わず、平気で鼻をかみ啖をはく中国人も、やっぱり伝染病が恐いのだなあとその時思った。以後、私は日本から割り箸を持って行こうと心に決めた。

「食在広州（食は広州に在り）」ということでその日の夜は日本人の学生ばかり九人でものすごく高級なレストランへ行った。中に池があるくらいだから値段も相当なものではないかとみんなつぶやく。豚の丸焼きを中国語で何と言うのか知らないみんなは、豚に串を刺して火であぶっている絵を店員に見せたところ、その絵が大ウケで、見ては笑っていた。味はもちろん良く、大人数で行ったため値段もそこそこだったので、みんな上機嫌で

ホテルへ戻る。途中、路ばたで鍋をつついている人をよく見かけたが、その中身はイヌだったそうだ。

㈢

広州に別れを告げ、一気に北京へ飛んだ。広州の暖かさに慣れてしまっていた私は北京の風の強さ、冷たさにまいってしまった。空気が乾いているので洗たく物を干すには都合がいいが、何にせよ喉がすぐにやられてしまう。そろそろ緊張の糸が切れてきた私はガイドブックや時刻表を見て延辺行きの計画を立てるのが辛くなり、もうやめようと思った事もあった。それは一度や二度ではなかった。

それほど延辺という所はヘンピな所にある。天津経由をとると、夜中の一時に到着、吉林省の省都長春を経由すると早朝五時半に到着。北京でさえブルブル震えているのにまだ北へ行こうと思っている自分にあきれた。当然ながら後者の交通手段を選ぶ。現在中国では二種類のお金が流通している。一つは外国人用の「外滙兌換券」で、もう一つは中国人用の「人民幣」である。私は外国人だから前者しか持っていない。しかし切符を買う時にこれを出すと、いくら中国人のふりをしても「外国人料金」といって中国人の二倍のお金を取られてしまう。そこで私はブラックマーケットで兌換券を人民幣に交換。それを持って中国人と一緒に切符売り場に並んで待つこと十分、長春行き急行の寝台券を中国人料金で売ってくれた。三月二日、手に入れた切符を大事にポケットにしまい込み、北京駅の待合室でものすごい中国人の列に割って入り、やっとのことで長春行き急行に乗り込んだ。周りの中国人と色々話をしたが、誰と話してても決まって出てくるのは電気製品の話。日立、東芝、シャープ……。現在中国ではこの三社あたりが名の通ったところらしい。いずれにせよ乾燥した北京の気候に喉をやられた私は日が沈むと同時に床についた。

㈣

翌朝四時頃目をさまし、五時十八分長春駅に着く。まだ外はまっ暗で、かなり寒かった。日本から持って来たものの、正直言ってお荷物になっていた使い捨てカイロで暖をとりながら延辺までの切符をどうしようかと思って切符売り場に並ぶが、あまりの中国人の多さにどう考えても立席しか買えないようだ。そこで買うのは後回しにしてとりあえず駅前の中国人用ホテル・天池飯店で明

るくなるのを待ち、日が出てからは春誼賓館というホテルのソファーで眠っていた。フロントで切符の予約ができるのかと聞いてみると、首を横に振られた。再び長春駅の切符売り場に並んで硬座（二等車）の切符を買うと、なんと座れる席があった。これで今日中に延辺へ出発だ、と安心して長春の市内観光をする。まずは市の南端、南湖公園を見物する。湖は氷が厚く張っていたので歩くこともできた。自転車に乗って氷の上を走っている中国人さえいた。またワカサギ釣りの様に氷に穴をあけて魚をとっていた人もいた。しかし多くの魚は厚い氷の中でカチンカチンになって死んでいた。公園横の食堂で食事をとり、歩いて駅まで戻る途中、色々と満洲国時代につくられた建物を見たが、国会議事堂や城に似たものがあり、日本にいるような錯覚にとらわれた、と同時に言葉にうまく表せない複雑な気持ちが頭をよぎった。こうして長春での一日は暮れ、私は夜六時四十八分の列車に乗って延辺に向かったのであるが、乗車前に食べた夕食が非常に油っこくて気分が悪かった。それに二等車は一番安いので中国人民の足である。あふれんばかりの人々、絶えずたちこめるタバコの煙、身にしみる寒さ等々。ついに私はダウンしてしまい、食べた物をもどしてしまった。

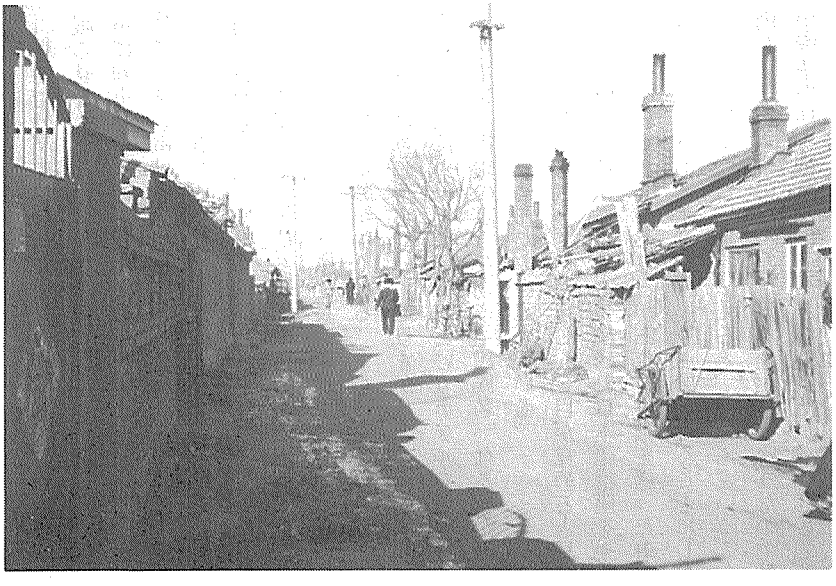
(五)

車内では深夜になっても話をする人でざわめき、仲々眠らせてくれない。午前二時、どうやら延辺朝鮮族自治州に列車は入ったらしい。耳をすませて聞いていると、乗客の話し声はいつの間にか中国語から朝鮮語に変わっていたし、車内アナウンスも二ケ国語でされていた。車内の音楽も中国音楽から朝鮮の音楽になっていた。結局まともに寝られず午前五時半に自治州の州都、延吉に到着。とにかく寒い。北京や長春の比ではない。金縛りのように一瞬体が動かなくなる。まずは宿探しと歩き出すが、さっぱりわからない。通りすがりの人に道を聞き、約五十分後にやっと延辺賓館というホテルを見つけチェックイン。宿帳のような物に「民族名」なる欄があり、「大和」と書き込んだのを覚えている。

いつの間にか眠っていたらしく、目が覚めると昼をまわっていた。私はここ延吉の放送で日本語講座をやっているのを日本で聞いたことがあり、手紙を送った事もあるので、とりあえず延辺人民放送局へ行くことにした。局の中を見学したい旨を伝えると、蔡さんという人が案内して下さる事になった。日本語がペラペラなので私が中国語を使う機会はほとんどなかったが、こうして私が

延吉にいる間は蔡さんのお世話になることになった。

延吉の商店の看板はすべて漢字とハングルで表記されている。私は蔡さんに連れられてある食品店に入ったが、さすがにトウガラシやにんにく、白菜、朝鮮人参などが目についた。昼食に焼いもを買うと、店員は私の服装を見て日本人とすぐにわかったようであった。だがその時中国語で「リーペンレン（日本人）？」とは言わずに、朝鮮語で「イルボンサラム（日本人）？」と言ったのである。私はその時この街が中国にありながら中国ではない、「ここは朝鮮なんだ」ということを身をもって感じた。後で見たら焼いもを包んであった新聞も全文ハングルで書かれていた。この時期は最も寒い気候だけにみなオーバーを着ていたが、夏は色とりどりの民族衣装が見られるのだそうだ。その翌日に、蔡さんは私を家に招いて夕食をごちそうして下さったが、家はオンドル式で床がポカポカ暖かい。出てきた料理も桔梗、もやしの唐辛子あえ、焼肉等すべて朝鮮料理だった。食事をしながら蔡家の人たちは「今度来るなら夏に来なさい。天気もいいし、本当の朝鮮文化が見れるから。」と言って下さった。それにしても朝鮮族の人々の食べっぷり、飲みっぷりは大したものだ。ご飯も私の倍は食べているし、ビールに



延辺朝鮮族自治州の州都・延吉の朝鮮族のオンドル家屋

しても日本では灯油を入れるポリ容器に満タンあったのをあっという間に飲みつくしてしまった。

延吉滞在中に私は小旅行をした。行き先は図們、豆満川をはさんで北朝鮮と隣接する国境の街である。昼ごろ列車は図們駅のホームにすべり込んだ。まずは昼食、ということで一軒の冷麺屋に入る。牛肉、キムチ、ゆで卵ののった冷麺が出されてきたが、味は満点！　今でもあの酸味のきいたスープの味ははっきりと覚えている。食事をすませて国境へ。ある一定の線から先は入れないらしく、皆そこにたむろしていた。私を見るやいなや「香港人だ。」と言われた。蔡さんが解放軍に特別の許可をもらってきて下さり、いよいよ国境の橋のたもとまで行けることになった。ただし条件が三つあった。一、橋に一歩たりとも足を踏み入れない。二、兵士に一言でも話しかけないこと。三、写真はとらないこと。北朝鮮の山肌に何か朝鮮語が刻んである以外は「何だ、こんなものか」と思うほど中国と似ていた。とてものどかで日本で報じられているほどに厳格な国ではないような気がした。見学を終えて午後四時半延吉に戻る。延辺朝鮮族自治州での最後の夕食はやはり朝鮮料理ということで、焼肉鍋とまた冷めんを食べた。焼肉鍋は味噌汁のようなスープがとてもおいしく、ちょっと日本の生活をなつかしく思ったりもした。蔡さんは最後に天津までの寝台急行の切符まで手配して下さり、私の延吉滞在中本当に面倒をかけた。

(六)

延辺を離れる日、駅で子供が物ごいにやって来た。最初無視していたらつついて来たのでポケットから小銭を出してその子にやった。三歳くらいの弟も同じように乞食をしていた。社会主義国にも乞食はいるんだなと思いつつ私は列車に乗り込み、延辺朝鮮族自治州を後にしたのであった。だがそこには、とんでもないハプニングが私を待っていたのだ。車内で一泊したのち、まもなく天津というところで列車は塘沽という駅に停車。どうやら列車の故障らしい。北京までバスで振替輸送するとかで、列車を降りたものの既にバスは行ったあとだった。その時故障のはずの列車は、駅前のバス停で立ちすくんでいる私や中国人を尻目に天津へと行ってしまった。

何が何だかわけのわからない私は、中国人に助けられてなんとか天津にたどり着くことができた。そして一週間経った三月一五日、私は中国最大の都市・上海からフ

ェリーで大阪へ向かっている最中だった。

(七)

今回の旅行はいくつかパプニングがあったものの、全体的にはほぼ予定通りだったと思う。しかしその裏には朝鮮族の蔡さんをはじめ、名も知らない多くの中国の人々の協力があったのは言うまでもない。言語や生活習慣の違う異国で、右も左もわからず立ちすくんでいた私に手をさし延べて下さった方々に今は深く感謝したい。

(中国文化コース・四回生)